

**奇怪伯爵の**

**オタ・カル漬柱**

**in 台湾**

**2012年・12月篇**



## これは、オタクの旅である

---

人の価値観は、さまざま。

自分が面白いと思うものが、他人にはつまらないかもしれない。

自分が美味しいと思うものが、他人には美味しくないかもしれない。

良いと悪いは、表裏一体。

それは、受ける側の人間の価値観によって評価される。

現在はネットの口コミによって、様々な価値観を知ることができる。

同じ事象に対しても、良い評価もあれば悪い評価もある。

特に旅行は非日常からの脱却であり、それなりの費用もかかることから、絶対に失敗したくないイベントだ。

事前に情報入手し、悪い個所は避けたいと思うのは当然のことだ。

インターネットのない時代を過ごした者にとっては、現在の情報量はアンビリーバブルである。

。

国内を問わず、海外の情報すら手に入る。

行ってみなければ、分からない。

そういう世界が、縮まった。

旅に関して言えば、ホテルの内装や設備、利用者の感想まで。

レストランのメニューと値段。味の支持率。

ガイドブックに載っていない情報すら、手に入る。

そうして念入りに下調べを済ませ、ようやく旅のプランを完成させる人も少なくないはずだ。

旅はプラン作りから始まっており、楽しみは既にそこから付随している。

しかし、中には全て友人や旅行会社任せという人もいる。

これも価値観の違い。

どちらが良くて、どちらが悪いという問題ではない。

問題は、旅に何を求めるかということなのだ。

この点に関しては、筆者である奇怪伯爵は貪欲だ。

オタク的欲求が渦を巻き、昇龍のごとく天に駆け上がる。

それだけに、下調べに時間を使う。

ネットを駆使し、今回の調査期間は約2カ月に渡った。

それでも、手に入らない情報は山ほどある。

それは何故か？

簡単にいえば、ネットですら掲載されていない情報を求めているからだ。

それはイコール自分が知りたいと思う情報を、公開してくれる人が極めて少ないということに

なる。

奇怪伯爵は、オタクだ。

だが、オタクの種類も千差万別。

欲求は、無限に存在している。

奇怪伯爵は、人よりこだわりを持っているが、社会的でない故に要らぬ労苦を被ることが多い

。

これをもって、本書はオタクの旅と称している。

グルメは美味で、コストパフォーマンスの高いもの。

安くて、美味しい烏龍茶の入手。

アジアン・ホラーの実態調査。

台湾ゲーム市場の調査。

パイナップルケーキ食べ比べ。

などなど……。

どうみても、万人ウケするとは思えない興味の欠片たち。

それを満たすことができる要素が台湾には溢れている。

伯爵にとっては珠玉の内容であり、ロサンゼルス・ウォルト・ディズニーランド5日間よりも魅力ある旅行なのだ。

おそらく、伯爵の旅を理解できる人間は僅かである。

また、皆のガイドブック的役割を担おうとは思っていない。

いうなれば、本書は全く参考にならない内容であり、独断と偏見、科学的根拠や裏付けのない意見に満ちている。

ツマラナイと罵倒され、うんこ伯爵と呼ばれ、パプー追放という処遇が待っているかもしれない。

それでも、同じ価値観を持った人はいる。

その人が、旅行に行きたくても行けない状態だとしたら。

少しでもオタク的喜びを共有してもらおうべく、伯爵はこの本を紡ぐ。



## 奇怪伯爵って、何者？

---

行動的な人から見れば、奇怪伯爵の旅はチャンチャラおかしいと思われるだろう。

消極イズBESTが伯爵のモットーであり、人との交流が好きとか、友達100人とか、始終誰かとメールや電話しているという人間とは対極をなすタイプだと思っていただきたい。

また、見知らぬ店に入るのは一苦労。

まずは店外から様子を偵察し、店の前を二度は素通りする。

自己基準に満たない内装は、入店中止。

他に客が誰もいない場合は、入店延期。

など、ビビリの最先端を突き進む。

行動力がゼロに等しい伯爵は、人との交流をできるだけ避けることを目標にしている。

会社では、仮面サラリーマンを演じなければならない。

誰にも本性を知られることなく仕事に従事。自分のチームすら持っている万年課長だ。

ソツなく仕事をこなすことから、適度な地位をキープ。

一応、数名の部下がいる。

年間を通しては、かなり多忙。

平日は、仕事だけの生活。

定年の訪れをキリンの首のように待ちわびているが、それはかなり先の話である。

映画や漫画、小説等にのっぴきならない興味を示し、特にネット上ではホラー映画レビューを中心としたブログも開設。

それが高じて、日本版が発売されないようなホラー映画も鑑賞するようになった。

ファミコン以前からテレビゲームに手を染め、初代使用パソコンはシャープのMZ-2000

。

数々のコンシューマー・ゲーム機を所持し、ゲームに明け暮れた学生時代を過ごしている。

現在はPCで輸入ゲーに手を染める。

永続的に金欠で、金が惜しいがために英語のゲームで遊ぶのだ。（輸入版は日本語版んび比べて概ね安価なのだ）

音楽は、ソプラノボイスの女性シンガーやヘヴィ・メタルなど。

日本のバンドでは『陰陽座』・『L I V MOON』。

海外は北欧系パワメタやシンフォニック・メタルを主に。

ツイン・ギターにキーボード編成で、ボーカルの声質とギター・ソロ重視。

その反面、台湾アイドル・王心凌やK A R Aにもハマる無節操さで、ロビンソン・クルーソー的孤立感を漂わせている。

グルメに興味はあるが、高いものには手を出さない。

この値段で、この美味さかよッ！

これが、伯爵の中で最も価値ある評価だ。

高い金を出して美味しいのは当たり前。

それに安さが加わって、初めて真の姿を知ることができる。

もっとも、高い金を出せない身分にあるのだが……。

三つ星レストランなど、おそらく一生行くことはない。

しかし、伯爵には数々のグルメ漫画やエッセイのウンチクが蓄積されている。

『美味しんぼ』を繰り返し読み、『孤独のグルメ』の真似をする。

『ソムリエ』読んでワインを齧り、『大人の週末』を毎月欠かさない。

ウンチク無くば、味知らずと唱えたのは、ニーチェだったか。

とにもかくにも、ウンチクだけのエセグルメを気取ることをお許しいただきたい。

思いつくままに自分像を列挙してみたが、自分で自分が理解できない。

ただ、相当に面倒くさいヤツであることは間違いなく、旅に求めるものも一般とはかけ離れていることが何となくおわかりいただけるかと思う。

奇怪伯爵の旅。

相当に面倒だ。

## オタクが台北で出来ること

---

人は具体的な目標を持った方が、行動を効率化することができる。

今回の旅にも、具体的な目標が必要だ。

それが実現できれば達成感を得ることができるし、最終的な旅の満足度は上昇する。

そこで興味のあるモノを書き出し、達成の難易度別にカテゴライズ。

これが、今回の旅プラン原案となる。

□実現可能度：高

- ・お茶を買う（前回購入した店プラス新規開拓店）
- ・パイナップルケーキを買う（微熱山丘・その他店舗）
- ・辛い麺を食べる
- ・鼎泰豊に行く
- ・ゲームを探す
- ・台北地下街を歩く
- ・孔子廟に行く
- ・春水堂でタピオカ・ミルクティーを飲む
- ・書店で台湾オリジナルの漫画を探す

□実現可能度：中

- ・ホラー映画DVDを探す
- ・映画『那些年』DVDを探す
- ・『パレ・デ・シン』ホテルのアフタヌーンティーを体験する
- ・『宇宙人探索展』および『変形金剛展』を見る

□実現可能度：低

- ・台湾ドラマ『18禁不禁?』サウンド・トラックを購入する
- ・中国の特撮モノ『鎧甲勇士』DVD-BOXを探す
- ・韓国の特撮モノ『RAY FORCE』のDVDを探す

なんという壮大な計画。

会社で言うなら、年間売上総利益・前年比120%を目標にしたに等しい内容だ。

立てよ、国民。

立てよ、オタク。

お前なら、やれるさ、トム。

誰よりも遠くへ。

地平線の彼方で待っている、素晴らしい明日に向かって……。

伯爵は体を震わせ、期待と不安の両方を噛みしめていた。

闇雲に列挙された目標を見て、貴方は意味不明と思うことも多々あるだろう。

しかし、ご安心いただきたい。

次章以降で懇切丁寧に解説するつもりである。

さて、書き出された目標（あるいは欲望）の全てを実現することは不可能である。

特に食は、基本一日三食。

それに比べて、行きたい店はその三倍はある。

今回の旅に相応しくなるよう、厳選しなければならない。

鼎泰豊は、外せない。

麺も食いたい。

肉魯飯も試したい。

茶芸館の食事もいいな。

などと話はまるで進まなくなり、プランの見直しを余儀なくされる。

通勤電車の中。

仕事中。

トイレの中。

伯爵の頭は、常に台湾のことを考える。

ツライ仕事の最中に、台湾に在る自分を想像。

負けないで。

頑張って。

もう少しだから。

ああ、台湾が自分を応援する声が聞こえるう……。

そんなヤバい精神状態が、何日続いたことか。

そして欲望の欠片たちは、しだいに一つの形を作っていた。

それこそが、2012年12月の台湾旅行プランだ。

苦しみの中で、ひたすら拾い集めた希望。

一年の疲れを癒してくれるであろう心の糧。

この旅行には、並々ならぬ決意と希望と喜びを詰め込もう。

たとえ、それが他人にオタクと言われようとも。



今回で台湾は5回目。

オタク的欲求を開花させてからは、3回目である。

1回目は、大学の仲間とともに一般的な観光ツアー。

2回目は、会社絡みの研修ツアー。

共に、一般的なツアーだった。

そして、オタク的要素を帯び始めた2011年の6月と12月の3・4回目。

ここから、奇怪伯爵はひたすらにマニアックになっていく。

欲求の変化も著しい。

初めは台湾のアキバといわれる光華商場を目指すだけだった。

小籠包も、食べられれば」良いという程度。

CDやDVDも、日本より価格が安いだけという認識。

土産は、あまり美味しいと感じないパイナップル・ケーキを挨拶程度に購入。

それが大幅に方針変更し、マニアックな形態へとチェンジ。

同僚からは、『また台湾行くんですか？ハマってますね』などと言われるものの、伯爵のハマり具合なぞ彼には理解できるはずがない。

これは、オタク的気質を持つものにしか分からぬ、神の領域である。

夢の中にオタク神が降臨し、道を示されたことがあるか？

あるはずもない人間に、伯爵の感じる醍醐味を理解できるはずもない。

だから、伯爵は本心を口にしない。

『ええ、まあ。食事が安くて、美味しいですし……』

などと一般人を装い、昼行燈を演じている。

伯爵がオタク的旅を楽しんでいるなど、誰も思わない。

誰も知らない。

知られちゃ、いけない。

奇怪伯爵が、誰なのか。

2012年12月のとある早朝。

前々日までに鬼のような残業をこなし、ようやく休暇をもぎ取った伯爵は起床した。

就寝時間午前2時30分。

起床時間午前5時ジャスト。

これから海外へ行こうとする人間には、あまりに過酷な状況だった。

6時過ぎには電車に乗ったものの、予想外の混雑。

座れないのは、大きな誤算だった。

仕方ないので、吊革につかまってジョジョ立ち。

やることないので、ジョジョ立ち。

呼吸を深くして、波紋を練ったり。

片足で立ってみたり。

途中、意識が飛んだりするものの、ジョジョ立ちで目が覚める。



ようやく降り立った浜松町駅。

ピス小僧サンタ・フォームに『行ってきます』の挨拶を施し、モノレールに乗り換えて羽田空港・国際線ターミナルで下車。

ここまで来ると、一安心。

チェックイン開始の1時間も前に到着し、安堵の息を漏らした。

朝食でも食べるかと、レストラン街を調査。

昨年食べた蕎麦屋が、まだ開店していない。

寿司屋もやっていない。

開店時間を変更したに違いないが、これはショックが大きい。

寝不足と空腹のダブルパンチ。

開いている店もあるが、メニューとコスパの観点から判断に迷う。

旅行なのだから、ちょっと気を大きくしても良いのではないか。

そのような迷いはあるものの、まだ日本の段階で金を使って良いものか。  
結局、探索範囲を拡大することにし、レストラン街を離れた。

探索の結果、『上島珈琲店』発見の狼煙。

胡麻ポテト&チキンサンドとドリンクセット490円が、ねずみ小僧の撒いた小判のようにありがたい。

窓際の席は、モノレールを間近に眺められるグッド・ロケーション。

立ち上る珈琲の香りが心地良く、しばしホンノリ・ムードに。

なんとなく幸先が良い気がして、順調なスタートを喜ぶ。

調子に乗って、モノレールをパチリ。

写真撮っているの、伯爵だけだなあ。



## エバー航空

---

羽田ー松山空港・台北便の就航は、ヘタレな伯爵にもパッケージツアー卒業という快挙をもたらした。

松山空港にはMRT（地下鉄）の駅があり、タクシーやバスに乗らずとも移動が可能。

タクシー・バス嫌いな伯爵にとって、これはポイントが高い。

料金や発着時間の観点から、航空機はここ数回、全てエバー航空を利用。

2012年12月の段階では、往路BR189便が羽田10:45発ー台北・松山13:30

。復路BR190便は台北・松山16:00ー羽田19:50着。

現地での滞在時間が、伯爵にとって好都合だ。

機材や時間は変更の可能性があるので、あくまで本旅行当日のこととして紹介するが、機材はエアバス330ー300。

座席配列が2ー4ー2になっており、ペアの旅行には最適。

となりにムサイオッサンや規格外ファットマンが座るというリスクも回避できる。

航空運賃（エコノミーでも）によっては事前座席指定が可能で、座席に拘る方にも嬉しいパフォーマンス。



機内食は、私的感想では可もなく不可もなくといったところ。

伯爵はドリンクに白ワインを選択し、全てを食べきった。

今回の旅行では、往路も復路もハロー・キティ仕様。

機内食用のプラスチック・ナイフやフォークはピンクに色付けられており、中年男性には相当の羞恥心を投げつける。

ピンクのフォークを持って、ワインをすする。

周囲の乗客の目が気になってならない。

ワインはステータスをあげるが、ピンクはどうよ！？

林家パー子の一人笑いが、なぜか脳裏に浮ぶ。

美人のCAが通りがければ、すかさずフォークを置く。

必然的な外的環境にもかかわらず、伯爵は己のプライドを貫くのだった。



伯爵は、日頃の疲れからか、移動時にはすぐに睡眠に入る。

しかし、エバー航空では寝てなどいられない。

なぜなら、機内上映の映画が充実しているからだ。

前回はそのことを知らず、惰眠をむさぼった。

その教訓を活かし、今回はすかさずラインナップをチェック。

伯爵の気になった映画

- ・『エクスペンダブルズ2』 日本ではDVD発売前
- ・『るろうに剣心』 同じくDVD発売前
- ・『バンコック・カンフー』 タイ映画。事前情報全くなし。格闘映画らしい
- ・『クラッシュ』 ベトナム産の格闘アクション

その他、CSIやHawaii-Five-Oなど海外テレビもあった。

往路のフライト時間は3時間45分。復路は気流の関係で2時間50分。

離陸時等は見れないし、食事時間は集中できないから、時間は大切にしなければならない。  
すかさず作品をセレクトし、行動に移す必要がある。  
気になるラインナップからの脱落は、まず『クラッシュ』。  
実は既に輸入版を購入済み。  
ここで出逢えるならば、購入しなかったよ、たぶん。

少々複雑な思いを残すも、次の選択へ。  
やはり気になる、『バンコック・カンフー』。  
なんなのだ、これは！？  
全く知らんぞ。  
一般ウケしそうなもないから、日本版が発売される可能性は低いだろう。  
ここで見なければ、二度と出逢うことはないかもしれない。  
他の2作品は、まちがいなく再会の可能性があるな。  
という訳で、まずは『バンコック・カンフー』を。

タイトルどおり、タイのバンコック舞台。  
幼い子供たちを誘拐し、芸を仕込んで金を稼がせる闇組織が暗躍。  
言うことを聞かぬ子供たちには、キツイお仕置きが待っている。  
両目を潰される子供。  
舌を切られる子供。  
ヒい〜。  
ホラーか、これは？と思っていたら、謎の爺さんが登場。  
爺さんは空を飛び、拳銃の弾丸をよけ、悪人たちを一掃。  
残された子供たちは、爺さんに引き取られ、超絶技をマスターした若者となる。  
成長した若者たちは、皆イケ面の男達。  
仲間うちですったもんだがあって、最終的には闇組織に復讐を遂げるといったストーリー。  
残念ながら英語の字幕で、話が分かりづらい部分もあって、解釈率70%。  
イケ面俳優起用のためか、カンフーシーンは特殊効果に依存だったのが残念。  
気で相手をスッ飛ばしたり、氣功砲を放ったり。  
やはり日本発売は微妙な内容なので、ここで鑑賞は正解。

続いて、もう一丁。  
すかさず『るろうに剣心』を鑑賞開始。  
やはり途中で着陸となり、続きは復路に持ち越されるのであった。  
窓から見える景色は曇天。  
いや、雨が降っているようだ。  
まずい。

この後の計画に狂いが.....。

不安に駆られながら、CAには笑顔振りまく伯爵。

いざ、台北。

機内食：豚=かつ丼だった



機内食：鳥



予定時刻どおり13:30に台北・松山空港到着。  
前は、そのままMRTでホテルへと向かった。  
台北の主なホテルのチェックイン時刻は、15:00。  
少し早い時間だが、あまり混んでいない時は早めに部屋に通してくれる場合もある。

今回はホテルに行く前に、一つの目的があった。  
空港を一步出て、空を眺める。  
あれッ、先ほどまで降っていた雨が止んでいる。  
ランディングから、まだ30分程度。  
なのに、この幸運。  
神じゃあ。神がお助け給うたわ。  
伯爵のツレは、意味ありげに唇を緩めた。  
空港のコインロッカー（スーツケース用）に荷物をパイルダー・オン。  
長袖の上着まで放り込み、キャスト・オフ。  
これで、身軽になった。

空港を出て、ひたすら左へ。  
関係者のみが利用するような建物を横目に、先を急ぐ。  
この道で良いのだろうか？  
そのような疑問が湧き、地図を確かめる。  
むむう、細部が載っておらん。

分からぬ、分からぬぞー。

引き返そうかとも思う。  
しかし、ツレはそれを一喝。

『こっちで、良いんじゃないね？』

仕方なく、先を進むことに。  
交通量が無茶苦茶多い道路をアクロスし、排気ガスに曝されながらも、どうやら正しい道を歩いていることが分かった。  
Tシャツ1枚でも暑い。  
日本の寒さが、ウソのようだ。



しかし、道行く通行人は、コートなどを着用。

外気24℃はあるはず。

このギャップは、旅行最終日まで続く。

寒がりや、台湾人。

伯爵らが目指していたのは、『微熱山丘』というパイナップル・ケーキ店。

台湾土産の代名詞ともいえるパイナップル・ケーキ。

職場の人間など、あまり重要でない方たちのバラまき土産としては、最大限の効力を発する。

もらった方も『ああ、台湾行ってきたのね』と暗黙のうちに了解し、ポイと口に放り込んで『ごちそうさん』となる。

そこに『凄い美味しい！』『ブラボー！！』『どこに売っているの！！！！』などの感激は微塵もなく、一種の社交辞令として処理される。

パイナップル・ケーキの一般認識とは、こういうものだろう。

ところが、実際はもっと奥が深い。

あれは、伯爵が会社の研修旅行の時だった。

他社の人間も合同で参加しており、ツアー・メンバーはお互いに見知らぬ者ばかり。

そのメンバーの一人であるオバちゃんが、現地ガイドをお願いしていたらしい。

バスは、台中のとある菓子店に横付けされた。

聞けば、台湾では有名な店らしい。

オバちゃん、そこでパイナップルケーキ20箱ぐらいを大人買い。

凄い大荷物にも関わらず、表情に溢れる達成感。

伯爵は、今でもそれを忘れない。

その時知ったのだ。

パイナップル・ケーキが店ごとに味が違い、実に奥が深いということ。

そして今、伯爵が辿りついたのは、台湾でも人気絶大らしいパイナップル・ケーキ専門店である。



その店は、公園に面していた。

空港から徒歩15分程度。

一見すると、何の店だかわからない。

看板があるものの、それは極めて地味。

店内は混雑しているようだが、売っているものは外からは確認できない。

伯爵はビビリ、ツレが先頭に立って入店。

入口に女性店員が立っており、笑顔で迎え入れる。

こちらが日本人だということは、すぐに外見で判断できるらしい。

『試食しますか?』と、日本語で聞いてくれる。

あなたは、頷くだけで良い。

すると、大きなテーブルへと通され、着席をすすめられる。

間もなく、試食用のパイナップル・ケーキ1個と烏龍茶が供される。



従来のパイナップル・ケーキを覆すパッケージ・デザイン。

餡は、パイナップル100%（一般的には冬瓜を混ぜているらしい）。

味の違いは、一食瞭然。

洋菓子に近い。

一個食べれば十分なボリューム感。

人気が高いのも納得。

この店、商品はパイナップル・ケーキのみ。

壁に5個入り、10個入り、20個入りの三種が、見本として置かれている。

購入方法は、レジで注文。

英語で通じたが、日本語が通じるかどうかは疑問。

なかなか洒落た袋に入れてくれるので、土産としての見栄えも良い。

ツレも満足したのか、15分の復路をスキップで戻る。

タクシーを使えば、もっと楽なのにね。





## MRTでホテルへ向かう

---

無事に『微熱山丘』のパイナップル・ケーキをゲットした伯爵ら。  
意気揚々と空港に戻り、スーツケースをコインロッカーから取り出した。  
タクシー使えば楽だが、嫌いだからしょうがない。  
ちなみに、タクシーに関するトラブルがあって嫌いになった訳ではない。  
ただ、伯爵がヘタレなだけで、車だとどこに連れて行かれるか分からないという恐怖心があるだけだ。

スーツケースを転がし、MRT（地下鉄）の駅へと向かう。  
自動券売機で切符を購入。  
カジノのチップのような青い円形のものが切符だ。  
改札入る時に所定の位置にかざし、出るときは投入口に入れる。  
時間は15:00近く。  
さすがに列車内は混雑していなく、大きなスーツケースを持っていても問題なし。  
ホテルの最寄り駅・大安までは乗換え不要だった。

MRT内は、飲食禁止。  
うっかりペットボトルでも飲みそうになるが、それは『ダメ、ぜったい』なのだ。  
感心させられるのは、乗客のマナーが比較的良いこと。  
大声で話す人も見られず、優先席はかなりの割合で空いている。  
マナーが良いって、素晴らしい。

昼間は比較的空いているMRTだが、やはり通勤ラッシュ時は混雑する。  
その時間帯にスーツケースを持って乗りたくないし、何の荷物を持っていなくても同じ。  
1日目の夕食は小籠包で有名な鼎泰豊を予定していたが、MRTのラッシュにぶつかりたくなかったので、徒歩でも移動が可能な地域を宿泊地とした。  
ちなみに鼎泰豊は店舗が幾つか存在し、今回は忠孝復興駅直結そごう内を選択。  
食事場所によってホテルを決めるのはどうかと思うが、伯爵の価値観はそういう風に出来ている。

## パークタイペイホテル 台北美侖大酒店

---

1泊目の宿泊先『パークタイペイホテル』。

MRTの**大安駅**階段をおりてくると、目前に横断歩道が現れる。

MRTで来た方向に戻る位置にあり、徒歩2分程度。

雨でも最小限の移動で済むのが、チェックポイントの一つ。

そして何よりも**新しい**。

開業して数年も経っていない。

裏情報でもないのだが、このホテルのオーナーは旅行会社の社長でもある。

当然ながら日本人観光客の求めるものは分かっている。

豪華さというよりは、機能を追求したホテルだ。



見落としてしまいそうなエントランス。

入るとすぐにドアボーイならぬドアシニアなオジサンが『**チェックイン?**』と聞いてきた。

流暢とは言えないが、間違いなく日本語。

少し安心するも、フロント男性は英語を駆使した。

しかも異常に早口だ。

台北でこんなに早い英語は、聞いたことがない。

脳内いきなりトップ・スピード回転。

**エンジン全開、サイクロン。**

海外のホテルチェックイン時に言われることは、大体分かっている。

パスポートの提出。

クレジットカード（旅行会社等で先に支払っている場合も、提示を求められる場合が多い）の提出。

チェックアウト日の確認。

朝食場所の説明。

伯爵の理解度は80%程度だが、さも理解したかのように振る舞った。

内心は、冷や汗タラタラ。

冷や汗のタラちゃん状態である。

キーをもらおうと、これ以上の会話をせぬよう、エレベーターを目指す。

なんと、フロントのおっちゃんが追尾。

ホームिंग・ミサイルじゃあ。

ツレが、ぼそり。

こちらはスーツケースがある分、不利だ。

エレベーターのドアがあく。

おっちゃん先に入り、キーを特定の場所に挿入。

なるほど、セキュリティが働いているのか。

そういえば、先の説明でそのようなことを説明していたような気がする。

客室フロアは、キーによって記録されているフロア、つまり自分の部屋のフロアだけに行くことができるのだ。

おっちゃんの親切心に感謝するとともに、疎ましく思ったことを心の中で謝罪。

ホームिंग・ミサイル扱いしたツレは、知らん顔。

部屋の広さは十分。

トイレもウォッシュ・レット。

風呂もバスタブがあり、清潔感漂う。

そして、楽しみにしていた部屋からの眺め。

101ビュールームという部屋を選択してあったので、窓から台北101という高層ビルを眺めることができる。

オー、101が真正面ではないか！！

感激するも、その周辺にはアパートやらマンションが立ち並ぶ。

これが、台北だなあ。

妙に感慨深い。

ちなみに、部屋は防音機能が備えられているらしく、外の音は聞こえてこない。

街中に位置しながら、静寂。

これって、普段から周囲の音に悩まされる伯爵にとっては喜ばしいことだ。

たまたま周囲に客が入っていないのか、防音の効果なのかは分からぬが.....。

とりあえず快適なベースキャンプの確保に安堵。







ホテルで小休止後、夕食に出掛ける。

前々回は、MRT大安駅から徒歩で永康街にある『鼎泰豊』の本店へ。

やはり、本店でないとダメなのではないかという、全く根拠のない強迫観念に駆られたからだ。

さらに前回は、太平洋そごう百貨店復興店内にある支店を訪れた。

結果、自分の舌では味の差が感じられなかった。

本店にこだわらなければ、使い勝手はグッと良くなる。

(ちなみに2012年にMRTの新線が開通し、観光客に人気の永康街への利便性が高まった。)

別に本店でも良かったが、大安から本店までの道筋は交通量が多く、排気ガスが気になる。

時間にして15分程度だが、食事前の排気ガスは避けたいところ。

そのため、今回も忠孝復興店に決定したのだ。

大安から忠孝復興駅までは、MRTでわずか一駅。

排気ガスが気になるといっておきながら、再び徒歩にて移動。

しかし、道はこちらの方がまだマシだった。

ホテル周辺の探索も兼ねるので、これはこれで楽しい。

歩くこと10分程度。

太平洋そごうの建物は、外見から簡単に判断できた。

既に何回か訪れているので、迷わず地下へ。

ここに『鼎泰豊』の支店がある。

店の入り口付近はいつも賑わっており、周辺ベンチにも腰かけている人たちがいる。

時刻は16:30。

こんな時間でも、待っているのか?と思ったが、まずは入り口の店員に人数を告げる。

すると、そのままテーブルに案内された。

あの人たちは、何だったのか?

疑問が解消できないが、メニューを見たら集中・集中。

何を喰うか?

この選択に、命をかけるのだ。

小籠包は、欠かせない。

これが、店の最大のウリ。

台湾人はもとより、外国人も魅了して止まない、看板メニュー。

伯爵は、この料理を漫画『美味しんぼ』で知った。

『ホフ、ホフ、熱い、熱い』

あの海原雄山が、子供のような食べ方をしたのが強烈な印象を残した。

外見は、ベビー肉まんのよう。

だが、中には肉の餡とともにアツアツのスープが仕込まれている。

このスープが重要で、これがヌルいと正統とはいえない。

『美味しんぼ』を読んでいなければ、伯爵は小籠包という名前すら知らなかった可能性が高いのだ。

さて、熱いスープに話を戻す。

比較的スープの量が多いので、口に入れるとリスクを伴う。

絶妙な薄さと弾力を持つ皮は、ちょっとした歯の圧力で破ける。

すると、熱いスープが、口中にピューッと出る。

ピューッと吹くジャガーならぬ、ピューと吹くスープ。

当然、熱い。

熱いが、美味しい。

それが、小籠包の醍醐味なのだ。

火傷など、気にしてはいけない。

火傷を怖れては、真の小籠包には辿りつかない。

熱過ぎて無様な姿を曝そうとも、美味探求を忘れるべからず。

口中の皮がベロベロになっても、伯爵は美味を追求する。

残念ながら、常にアツアツの小籠包が供されるとは限らない。

これは鼎泰豊だけにあらず、他店にも言えることだ。

小籠包は、非常に繊細な料理。

すぐに冷めてしまうので、出されたら即食の必要がある。

伯爵のように写真などを撮ったり、はたまた余裕こいて別の料理を先に食べたりすると、アツアツなスープはすぐに冷めてしまう。

もちろん、すぐに食べても、アツアツでない状態でない店もある。

店と客の双方で、注意が必要なのだ。

また、作り手の技術が非常に色濃く反映されるのも小籠包の特徴。

皮の厚さや強度が、重要なところ。

鼎泰豊は、この皮が凄い。

基本、皮は薄く滑らかな方が美味。

だが、皮を薄くすれば、それだけ脆くなる。

これまでに、箸で持ち上げたら口に入れる前に破けてスープが流出なんて事例が多々あった

。美味なスープが、目前で消える喪失感。

釣った魚をバラす行為に似ている。

そういう小籠包は、レンゲに載せたりして、余計な神経を使わなければならない。

レンゲの力など、借りとうないわっ！！

世の中のアンチ・レンゲ派は、歯ぎしりして屈辱に耐えるのだ。

その点、鼎泰豊の小籠包は素晴らしい。

箸で持っても、破れない。

口に入れると、皮なめらか。

噛むと、ピューッ。

緻密なシステム分析と、職人技術の合致。

やるじゃない。

いかにも鼎泰豊ファンであるような私だが、実は否定派であった。

ひっきりなしに訪れる観光客。

旅行会社のパッケージ・ツアーには必ずといってよいほど組み込まれている。

そのような状況で、味が落ちぬ訳がない。

サービスだって、期待できぬ。

勝手にそう決めつけて、他店にばかり行っていた。

ある時、台湾人と話す機会があって、聞いたことがある。

『あれだけ毎日混んでいるけど、本当に美味しいの？』

答えは、イエス。

地元の人でも、やはり評価は高いようだ。

この答えによって、伯爵の反・鼎泰豊思想は終わりを告げた。

それなら、行ってみるか？

何とも、自分勝手。

小さい人間だよ、伯爵は。

そういう声が、聞こえてきそうである。

伯爵を虜にしたのは、小籠包だけではなかった。

麺類やチャーハン、スープといった、日本でいう中華定番料理の味が予想以上に美味なのだ。

初めは、小籠包にばかり気を取られていた。

小籠包は、意外と腹にたまる。

しかも、蟹ミソ入りだの、海老入りだのと魅力的な具材も多く、つつい注文してしまう。

これでビールを飲めば、かなり満腹。

これでチャーハンでも頼めば、一話完結となる。

だから、他の料理をあまり試すことができない。

しかしある時、気付いてしまったのだ。

麺やチャーハンが、予想以上に伯爵好みの味付けだということ。

今回は、ビールを断念。

食に全精力を傾ける。

前菜に『きくらげの酢漬け』。

コリコリの食感と、適度な酢加減が癖になりそう。

『これは、日本ではあまり御目にかかれないシロモノですよ』

などと、余計な解説をツレに披露。

『そんな事、言われなくとも分かっている』オーラが漂い、伯爵は口を閉じる。



続いて、小籠包登場。

醤油と酢をブレンドしてタレを作り、細切り生姜と共に口へ。

ああ、これだよなあ。

あっという間に、籠内を食べ尽くす。

小籠包は、これで終わり。

本当は、もっと食べたい。

しかし、後にも選手は控えている。



汁なしタンタン麺。

これは、まったく初めての注文だった。

外見を偽らない辛さ。

激辛ではなく、食べるのに適した辛さをキープ。

ときおり感じられる味の深み。

麺の硬さも適当だ。

正解。大正解。



続いて、ワンタンノスープ。

良い味だしてんじゃないか、このヤロー。

嬉しくなって、なぜかアントニオ猪木口調になる。



締めは、海老チャーハン。

パラッとした米粒。

上品。

海老、プリッ。

ワンタンスープとのコラボ、最高。

『こんなチャーハン、日本でもあまり食べられないですよ』

ハッとして、視線はツレに。

ああ、同じ眼で睨んでいるウ〜。



夕食を終えて店を出たのが、17:30。  
早いように思えるが、鼎泰豊が混雑することを見越しての結果だ。  
伯爵は行列が苦手で、できるだけ待ちたくない症候群である。  
さらに、日本と台北との時差は1時間。  
日本時間では18:30であり、けっして早すぎる時間でもない。

ツレの希望で、そごうから徒歩数分のところにある蜂蜜店へと向かう。  
蜂蜜店とはいっても、実際は蜂蜜を使用した化粧品店といった方が良いかもしれない。  
ハンドクリームやリップ・クリーム、石鹸などの製品があり、店の内装も女性を意識している。

あまり広い店でないので、伯爵はどうにも居心地が良くない。  
ツレは、店員とアレコレ商談。  
小さなカップに、蜂蜜飲料をサービスでいただく。  
女性の店員さんばかり、3名。  
他にお客はいない。  
興味のない伯爵だが、時間潰しにひたすら蜂蜜石鹸を凝視する。  
こういう店、一度入ったら、何も買わずに出るのは気が引ける。  
ヘタレな伯爵は、気が小さい。  
ツレがハンドクリームを買ったので、安堵のため息をつく。

蜂蜜店を出ると、MRTに乗って市政府駅へ向かう。  
時刻18:00。  
ホームは、凄い人高り。  
通勤ラッシュの時間帯なのだ。  
こんな満員電車で、乗りたくない。  
そのために、ホテルを大安地区に決めたのではなかったか。  
それなのに、MRTを使うとは.....。  
ホームに入ってしまった手前、止めると言ったらツレの怒りは間違いなく大噴火する。  
ここは、行くしかない。  
意を決して進むと、電車が入線。  
やはり、無茶苦茶混んでいる。

ところが.....。

あっさり降りた。



皆、この忠孝復興駅で他線に乗り換えるのだ。  
逆方向（台北駅方面）だったら、最悪だった。  
やはり、自分の読みは素晴らしい。  
危機回避能力が、優れている。  
オーケー、伯爵。  
お前に任せれば、ノープロブレムだ。

MRT市政府駅は、高層ビルで有名な台北101の最寄り駅である。  
しかし伯爵の興味は、別のところにある。  
それは台湾の有名書店『誠品書店』の信義店だった。  
誠品書店は、台北駅地下や西門地区などにも見られるチェーン店である。  
その旗艦店とも言える存在が、信義店だ。  
伯爵が見たところでは、一番規模が大きい。  
MRTの市政府駅から徒歩3分。  
地下で繋がっているので、雨の日でも傘なしで移動できる。

他店舗との圧倒的な違いは、やはりスケール。  
本やCD・DVDのほか、文房具や生活用品まで売っている。  
地下には、フードコートまであった。  
伯爵は、主に雑誌と漫画コーナー、そしてCD・DVDを物色する。  
雑誌は、日本のものが多い。  
アメリカ等の洋書も多く、逆に台湾オリジナルの雑誌は少ない。  
特に台湾の雑誌は、発売日付近でないと陳列されていないようで、探すことが困難だ。  
伯爵は台湾の旅行雑誌やゲーム雑誌を探したが、今回は購買意欲をそそるものは発見できず。  
ちなみに前は、王心凌（台湾のアイドル）が表紙の旅行雑誌を購入。  
満ち足りた時を過ごした。

続いて、漫画コーナーへ移動。  
やはり、日本の漫画が多い。  
日本の漫画を中国語に訳した正規品である。  
目につくのは、日本でも人気が高い『ワンピース』など。  
伯爵的には、『孤独のグルメ』デラックス版が堂々と陳列されていたことが印象に残る。  
渋いぞ、台北。

しかし、伯爵が求めるは、台湾オリジナル作品。

日本勢に比べると、圧倒的に数は少ないらしく、漸くそれらしき陳列棚を探り当てる。中には、面白そうなものがあるが、コミックは意外と重い。初日から飛ばすと、後が心配だ。とりあえず、購入は見送る。

最後に、CD・DVDコーナーへ。

本と同様、洋モノが目立つ。

映画は、ハリウッド製が大多数。

日本のものも、一角にまとめられている。

ホラーが目立つは、福谷修氏原作・中村静香嬢主演の『心霊写真部』か。

日本よりも扱いが良いようで、作品ファンの伯爵としては嬉しいかぎり。

また、前回の訪問でも発見した『[飯島愛](#)』イメージビデオが健在。

未だ人気があるのか、はたまた売れ残りかは不明。

他に目立ったものはなく、少々の焦りを感じながら物色は終了。

やはり、前回の訪問からわずか一年では、劇的な変化は期待できないのであろうか？

ちなみに、ここで何かを購入する場合、パスポートの提示を求められることがある。

なんでも外国人割引のような制度があるらしい。

言葉が解らないので、詳細は不明だったが.....。

誠品書店で時間を潰し、20時頃に再びMRT大安駅に戻った。

通勤ラッシュもすでに治まり、平穏さを取り戻している。

このままホテルへ戻るかどうか。

実は、事前情報で気になる店を発見。

四川料理の店で、今を逃せば今回の旅行では味わうことが難しい。

腹の状態7分目まで回復。

旅に出れば、チャンスは大事にしたい。

いつ来られるか分からない。

二度とチャンスは、ないかもしれぬ。

悔いを残すべからず。

内なる声に導かれ、伯爵らは店へと向かった。

大通りに面しているにも関わらず、道は暗い。

これがアメリカなら、きっと断念していただろう。

台北は、治安が良いほうだ。

辺鄙なところに行かなければ、危ない場面に遭遇する可能性は比較的少ない。

右手に大学が現れる。

意外と学生が残っている。

文化祭か何かの催しだろうか。

目指す采岳軒は、学生も多く利用すると書いてあった。

期待は、次第に高まってくる。



徒歩7分程度。

注意していないと、見落としてしまいそうなほど地味な外観。

中を覗けば、適度な混み具合だった。

入店すると、入り口レジ付近にオバちゃんがいる。

案内してくれると思ったら、無反応だ。

仕方なく、そのまま奥へと進む。

2階にも席があり、1階とは別の雰囲気を持つとの情報だったので、2階に上がろうとする。

オバちゃん、『ダメだよツ』のジェスチャー。

21時で閉店なので、2階はもう利用できないらしい。

オバちゃん、怖ええ。

とりあえず、1階で着席。

ネットでメニューを確認していたので、注文すべきものは決定済み。

注文は、席に置いてある伝票に数を書き入れるだけ。

近くを通りかかった別のオバちゃんに、伝票渡して注文終了。

これで、ようやく落ち着いた。

店内を見回してみれば、レトロな内装が心地良い。

ああ、中国的だなあ。

オバちゃんの不機嫌な表情も含めて、余韻に浸る。

采岳軒は、サイト『旅々台北』で知った。

手頃な四川料理を食べられる店として、伯爵の希望に合致したのだ。

記事を書いたのは、羅さんといい、台湾人らしい。

ここは、現地人のお薦めに従おうじゃないの！！

という訳だ。

待つこと数分。

料理は、一度に運ばれてきた。

まずは、紅油抄手60元（約180円）。

いわゆるワンタンをラー油で絡めたヤツである。

見た目を裏切らない辛さだが、食えないシロモノではない。

ストレートに近いジャブである。



これは幸先が良いか～と思っていると、他の2品で不安がよぎる。

川味タンタン麺（60元）と怪味乾拌麺（60元）。

60元という値段の安さが油断を招いた。

どうせ量は少ないだろうと、タカをくくっていたのだ。

予想以上に麺の量が多い。

こちらは腹七分目。手負いの虎、いや猫か。

ふとツレを見ると、『どうすんだ、こんなもん。責任取れよー』のまなざし。

これは、ピンチだ。

とりあえず、川味タンタン麺から。

汁なしタンタン麺を想像していただき、そこに粉末状態の胡麻が大量にかけられている。

粉の量が、見た目より多い。

グッチョリ、ねっちょり、ネルネル・ネルネ。

そして最後に届く辛み。

イメージとは程遠く、予想だにできなかった味に困惑。

しかも、麺は生温かく、少し柔らかめ。

硬い麺なら、何とかなっただかもしれない。

しかし、コンディションがあまりに悪過ぎる。

変則的なアップパーが、伯爵の顎を跳ね上げた。



口直ちに、怪味乾拌麺を口にする。

今度は、強烈な右フック。

ニンニク、ガツーン！！

すぐさま返しの左。

辛さ、ガツーン！！

料理名の怪味に偽りなし。

強烈味のダブル・フック。

しかし、こちらも麺は柔らかく、ヌルい。

思わぬ強敵出現に、伯爵は怖気づいた。



残す訳にはいかない。

ツレに頼る訳にもいかない。

アッパー、フック、フック。

連打を浴び、それでも倒れない伯爵。

コンディションさえ良ければ、勝つ自信はある。

実際、味は悪くない。

いや、空腹で食べれば、癖になりそうな味だ。

しかし、明らかな調整ミス。

辛さは体の許容範囲を超え、オーバーヒート。

店内で一人だけ、**大汗を流している**。

ハンカチで額を拭い、一口を放り込む。

すぐに次の汗が、流れ出る。

**ヒーハーツ**。

伯爵の口中も、大変な状態を迎えていた。

凄まじい辛みにも関らず、テーブルには一切の水分が置かれていない。

水は水質が心配だが、お茶ぐらいあってもよい。

メニューで飲料はビールと知らぬ名前のお茶のみ。

今さらビールを頼むのもどうか。

多分、腹が持たない。

見るに見かねて、ツレが注文したお茶が『**洛神花茶**』である。

ラベルを見ると、店の名前が印刷されている。

この店オリジナルだろうか。

ザクロのような色合いが、複雑な心境にさせる。

それでも、冷たい飲料はありがたい。  
ペットボトルなので、キャップを外してゴクリ。  
甘く、そして酸っぱい。  
お世辞にも、美味とはいえない。  
待てよ。  
不思議なことに、辛みが消えた。  
あれだけヒーハーな状態だったのに。  
不思議だ。  
辛さが、一瞬に消えた。  
凄い、凄すぎるぞ『洛神花茶』。



打ちのめされ、棒立ち状態だった伯爵。  
セコンドの配慮で、ノックアウトだけは免れた。  
結果、川味タンタン麺ほぼ完食。  
怪味乾拌麺は、6割まで。

翌日は、楽しみにしているホテルのアフタヌーン・ティーが控えている。  
ここで胃を壊しては、どうにもならない。  
ここは勇気ある撤退を。  
レジで支払いを終え、逃げるように帰った伯爵であった。  
ちなみに、レジの女性は笑顔でお礼を言い、愛想が良かった。  
不機嫌なオバちゃんなら、残した罪悪感も薄らいだのだが.....。  
いつ、あのオバちゃんが残したことに腹をたてて追ってくるやもしれぬ。  
後ろを何度も振り返る伯爵だった。

⇒2日目（近日公開予定）につづく.....





奇怪伯爵のオタ・カル漬井 台湾篇2012①巻

<http://p.booklog.jp/book/62369>

著者：奇怪伯爵

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kkaiki0710/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/62369>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/62369>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ